



Title	プロパガンダ・ポスターを担った忘れられた図案家・岸信男の生涯と活動
Author(s)	田島, 奈都子
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92370
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プロパガンダ・ポスターを担った忘れられた図案家・岸信男の生涯と活動

田島 奈都子 青梅市立美術館

研究の端緒と方法

岸信男（きし・のおお、1907-47、以降は信男）は、今日では全く忘れられているものの、1931年に勃発した満洲事変から45年の終戦までの、いわゆる十五年戦争期に、最も多くのプロパガンダ・ポスターを描いた図案家である。発表者は戦前期の日本製ポスターの調査過程で、信男の作品を閲覧する機会を得て、本人のサインが入っていなければ、作者が特定できない表現の多様性に、以前から強い関心を抱いてきた。しかし、戦後の混乱期に病没していることから、これまでその活動が検証されたことはなく、既往研究どころか関連資料も非常に乏しい。それでも、信男は当時盛んに実施されていたポスター用原画の懸賞募集に積極的に応募し、上位入選を果たしていることから、その際にはインタビュー記事が新聞に掲載されることもあった。このため本発表ではそうした記事も使用しながら、現存作品と合わせて信男の生涯と活動について検証することにした。

略歴

鉄道省に勤務する父のもとに生まれた信男は、広島県出身のようであるが、生涯のほとんどを現在の東京都新宿区東五軒町で過ごした。1933年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業し、銀行建築で著名な西村建築事務所に就職していることを考慮すると、信男の元来の関心は建築にあったと思われる。しかし、長兄・秀雄がカスピス社に嘱託の図案家として勤務する傍ら、杉浦非水を顧問とする図案家団体・七人社が結成されると、非水の一番弟子として、同社の活動を自宅内で行ってい

た関係からか、次第に商業図案への関心を強めたようである。事実、信男は1929年以降は32年まで、七人社が主催した「創作ポスター展覧会」に作品を出品している。また、早大在学中の1931年には、《第5回早慶対抗水上競技大会》を製作し、本作は現在確認できる信男の最も古いポスターとなっている。もっとも、信男が本格的に図案の道に進むようになったのは、長兄・秀雄と次兄・学と一緒に三兄弟で、1937年に岸スリーブラザーズ造形美術研究所という名の自営の図案社を、自宅内に開業してからのことであり、以降は同所の看板図案家として大いに活躍することになった。

特徴

信男の図案家としての特徴として第一に挙げられるのは、活動期間が1938-44年の足掛け7年間に限定され、時代的な要因から、手掛けた作品のほとんどがプロパガンダ・ポスターとなったことである。ちなみに、その数は約30点にのぼる。

第二に挙げられるのが、ほとんどの作品にサインが入っていることである。ここからは信男の自作に対する作品意識がうかがわれる。しかし同時に、信男が自営の図案家であったことも、忘れてはならないと思われる。なぜなら、研究所が存在した時代の信男は、サインとして岸三兄弟で起こした研究所を表す「K3モノグラム」を使用しているからであり、ここからは信男の作品を研究所の広告としても用いていたことが読み取れる。

第三に挙げられるのが、画面上にサインがなければ、誰の作品かわからないほど、よく言えば作風が多様性に富んでいることである。例えば、

1938年の《傷ついた勇士の手となれ足となれ》は、本人が好きな作家と語る、ドイツを代表するグラフィックデザイナーであるルートヴィヒ・ホールヴァイン風に描かれている。しかし翌年の《譲れ労はれ傷痕の勇士》には、当時特殊技法と目されていたエアブラシが利用されており、1940年の《支那事変報国債券（稲藁を抱える農婦）》は、アップリケの手法で作画した作品を写真で撮影し、それを原画として用いている。ただし、最も多い作風は写実的な油彩画風の作品である。

第四に挙げられるのが、ポスター用原画の懸賞募集へ積極的に応募し、上位入選を果たしていたことである。特に、1942年に関しては海軍記念日のポスターとして《輝く海軍記念日 月火水木金金》が、また軍事保護院のポスターとして《沸き立つ感謝 燃え立つ援護 ― 君がため何かをしまん若桜散つかひある命なりせば ―》が、それぞれ1200点を超える応募作品の中から1等を獲得し、ポスター化される栄誉を手に入れている。

第五に挙げられるのが、国内外の既存作品を翻案とした作品が多いことである。具体的な例を挙げると、1940年の《興亜の貯蓄は保険から》は、1939年4月発行のドイツの専門誌『ゲブラウスグラフィック』第16巻第4号に掲載された、フランコ・モスカによる《カレンダーのための絵》を翻案としていることが判明している。

評価

このような特徴を持つ信男をどのように評価するかであるが、プロパガンダ・ポスターを多く手掛けたことを理由に、評価をしないもしくは評価を低くすることは、あってはならないと考える。なぜなら、図案家という職業は平時においても、依頼主が存在しなければ成り立たないからであり、信男の作品に前述した特徴が顕著なことは、時代的な問題に起因し、信男のせいではない。

したがって、懸賞募集への入選をはじめとして、多くの作品が実際に世に出た信男については、そ

の点をもって評価するべきだと考える。

一方、国内外の作品を翻案としたものが多い実態や、そのような作品に関しては、今日的な価値観に照らし合わせると、低評価を下さざるを得ない面もある。しかし、戦前期の日本においては、残念ながら著作権に関する意識や権利が共有化されておらず、国内外の紙誌に掲載された他者が製作した作品を、翻案として自作を描くことは広くまかり通っていた。そしてこうした傾向は、多作な人物ほど顕著であり、信男のように足かけ7年間に約30点の作品を製作するとなると、全てを純然たる「創作」で仕上げることは、時間的にも能力的にも不可能であったと思われる。

また、数ある作品の中から何を選び、それをどのように活用するかについても、一定の感性や思考力が必要であり、自身にそれを的確に表す技術力が備わってなければ、作品化することもできない。そのような考えると、信男はこの時代に生きた図案家の中では、最も頭も回り手も動く、稀有な存在であったと評せる。

今後の課題

信男については現存資料が乏しく、最も詳細に記されていると思われる、1947年に編まれた『岸秀雄・信男兄弟追悼誌』は現時点では見つからず、発表者も未見である。そのうえ、戦時期の日本製プロパガンダ・ポスターに関しては、所蔵や公開に対して積極的でない面も否めない。ただしそうすると、信男の作品はまだどこかにそれと認識されないまま、眠っている可能性も考えられる。このため、発表者は今後も関連資料の発見と閲覧を続け、画面上のサインを手がかりに、信男の作品の発掘を行いながら、今日では完全に忘れ去れている図案家・岸信男の活動の全容把握に努めていく所存である。